



動物より伝播される感染症

犬や猫に咬まれたら

外科の診療所をやっていると、犬に咬まれた、猫に引っ掻かれたと言う患者さんがよく訪れます。また最近ではネズミ、ウサギ、フェレットなどをペットとして飼う人が多く、これらの動物に咬まれるケースが増加してきています。すぐに受診していただければいいのですが、一週間以上も経過して化膿し痛みがひどくなってから訪れる方もいます。一般に動物からの咬み傷や引っ掻き傷は、見た目に小さくても化膿しやすく、指先などが多いため傷跡が残り後遺症を起こす事があるのです。また種々の感染症を起こしやすい事が分かっています。必ず早期受診を心がけてください。

破傷風と狂犬病

動物に咬まれた際に命にかかわる恐ろしい感染症は、破傷風と狂犬病です。現在ではほぼすべての人が三種混合ワクチンとして破傷風の予防接種を行っています。20歳を過ぎた頃からワクチンの効果は落ちてきます。医療機関にてなるべく早期に注射（破傷風トキソイド）を受けていただければ、破傷風で死に至ることはまずありません。狂犬病は日本国内ではなくなった、と認識している人たちが大多数ですが、昨年海外で犬に咬まれた日本人が死亡したというニュースが流れました。狂犬病ウイルスはヒトを含めすべての哺乳類

に伝播し、ひとたび発症すると極めて悲惨な神経症状を伴ってほぼ100%死亡する最も危険な病気です。現在の世界における狂犬病の発生数は、毎年3万5千人と報告されていますが、実際の発生はこの数倍から数十倍と推測されています。日本は、法律による飼い犬への予防注射の徹底、放浪犬の取り締まりなど先人達の多大な努力により、1957年を最後に今日まで国内由来による狂犬病の発生はありません。しかし、長期の無発生により国民が狂犬病の恐ろしさを忘れ、飼い犬に対する予防接種を拒否したり、不法輸入されるペットを飼ったりするようになってきました。1984年に撲滅した韓国は、1993年に再発しています。

保健所への届け出を忘れずに

まず、自分の家で飼っている動物には必ず予防接種を受けさせてください。犬だけではなくありません。海外ではネコ、イタチ、キツネ、アライグマそしてコウモリからの感染も多数でています。咬まれたらなるべく早く医療機関を受診して、その動物の予防接種の有無を医師に報告してください。そして犬が人を咬んだ場合は、飼い主であれ他人であれ、県飼い犬管理条例により保健所に飼い主が報告しなければなりません。

【広報おかや8月号掲載】